

台湾・金門島の水問題

中国が水供給 台湾を守った最後の軍事拠点に

よしむら かずなり
吉村 和就
(グローバルウォッチャー、ジャパン代表
国連テクニカルアドバイザー)



中国大陸に最も近い台湾領の離島・金門島の慢性的な水不足問題を解消するために、中国の福建省が、金門島へ水を供給することで中台の關係当局が八月に合意した。具体的な水道管の建設時期やその料金、運営方法などは、これから検討が始まるが、台湾では大きな論議が巻き起こっている。

金門島は台湾本島より百八十キロも離れているが、一方中国本土から二十キロ、中国の領海権のある島からわずか二キロしか離れていない金門島、なぜこの島が台湾領なのか、そこには歴史に翻弄された島の歴史がある。

一、金門島への給水計画

金門島は、大金門島、小金門島、大胆島や二胆島など十二の島から構成され金門懸と称されている。人口は十一万四千人、台湾本島とは空路による交通が主で台北（松山空港）や台中、台南の各空港と定期便が運航されている。九二年の戒嚴令解除の後、特に「三通政策」の実施後は、多くの観光客が訪れる島となっている。中国からは海運路



線が開設され、厦門（アモイ）から毎日十二往復の定期便が運航されている。

島の産業は軍事関連施設と観光であり、大陸から多くのツアー客で成り立っている。気候は亜熱帯海洋性気候に属し、年間平均気温は二十一度、年間降水量は約一千五百ミリである。この位降水量があると島では十分に水資源が確保できるが、地層が花崗岩主体なので、帯水層が少なく地下水が慢性的に不足している。金門の必要給水量は約二〜三万トン/日であるが、水不足問題は深刻で、島にある地下水位は過剰な汲み上げで低下し、またわずかにある湖沼は汚染が進行している。このままで行くと二〇二一年の日給水量は約五千トン不足する事態になる。大陸からの金門島への給水問題は、既に十年以上に亘り、兩岸の關係者が協議してきたが、実を結ぶことはなかった。だが二〇〇八年からの馬英九政権下で進む対中關係改善の動きで、ここに来て大陸から提案の金門島への給水問題は急展開した。

・福建省からの提案

本給水プロジェクト計画によれば、福建省の晋江の龍湖より取水し、送水管で出海口へ引き込み、その後海底パイプ（十二キロ）で金門の田浦貯水池に引水し、その後は水量および水質の安定性を保つ為に、台湾側が独立した浄水場で水処理し、民生用（住民の生活用水）と国防用水（軍隊への給水）に区分し送水する計画である。晋江市側は、もし台湾が独自で造水するならば、トン当たり七〇〇元（約二千三百五十円）かかるだろうが、我々から水を購入すれば、七〇元（二百三十五円）で済むと経済的メリットを提案している。

・厦門市からの提案

中国側も一枚岩ではない。福建省・晋江市に負けるなどばかりに、今度は経済特区の厦門市が強烈なアタックを仕掛けている。現在建設中の厦門—金門大橋（二〇一一年着工、一六年完成予定、総工費約二百三十五億円）の橋脚を利用する送水管計画と、水量（当初日量三万トン、将来六万トン給水保証）と水質の優位性、さらに経済性を訴えている。厦門市の提案は、処理後の水道水を供給するので、トン当たり五〇元（百六十八円）で済むと主張している。

二、水は国家の安全保障に直結する

金門島の歴史を紐解くと、単なる水道だけの問題ではなく、血で塗られた両国の歴史が浮かび上がって来る。中国明代の軍人・鄭成功（一六二四—一六六二年）は清に滅ぼされようとしている明を擁護し抵抗運動を続け、台湾に渡り鄭政権の祖となった。台湾では民族的英雄として描かれている。この台湾の英雄が最後まで抵抗した軍事拠点が金門島であった。中国国民党が台湾へ移って以降は中華民国軍の軍事的拠点となり、一般観光客の出入りは厳しく制限されていた。また一九五八年極東を歴訪する米国のダルトン国務長官の台湾訪問を前に、対岸の中国人民解放軍（中国共産党）との間で激しい砲撃戦による「金門砲戦」が発生した。多数の死者を出したものの、中華民国陸軍は、中国の人民解放軍を打ち破り、金門島の防衛に成功している。しかしその後も中国人民解放軍による金門島への散発的な砲撃は継続され、結局二十一年後の一九七九年「米中国交樹立時」に砲撃が停止されたのであった。つまり金門島は台湾にとり中国と幾度となく戦っても、必ず勝利する聖地であった。

このような歴史的背景の中での「中国からの水供給提案」であり、当然「島の水を中国に抑えられことは、金門島を中国に渡すようなものだ、毒を入れられれば、島は全滅する」絶対を受け入れられないという反対派と、「時代は変わった、これからは兩岸の国が栄える政策を取るべきだ」との擁護派と、金門島内で論争が沸き起こっている。

三、金門島を守った謎の日本人

その日本人は、昭和二十年日本が敗戦してから四年後、「ある恩義」を台湾に返すために、この地に姿を現したのである。第二次世界大戦後、自由主義陣営と共産主義陣営との覇権争いが世界中で展開されたが、中国大陸でも熾烈な争いが繰り広げられた。それは国民党の蒋介石と共産党の毛沢東との血で血を洗う激戦であった。国民党軍は圧倒的な共産党の人民解放軍に撃破され、敗走に敗走を重ね、雪崩をうって駆逐されついに廈門、金門島に追い詰められた。誰もが共産党の率いる人民解放軍の勝利を信じていたが、台湾海峡を挟む最後の砦、この金門島の戦いだけは

国民党軍が勝利したのであった。謎の日本人が国民党軍を指揮し、奇跡といわれる勝利をもたらした。その日本人の名は平成二十年に明らかになった。

（門田隆将著：「この命、義に捧ぐ」の前文より）

謎の男は根本博元陸軍中將

謎の男は元日本陸軍北支那方面軍司令官・根本博中將であった。では根本中將の「ある恩義を返すために」はなんであったのであろうか。

昭和二十年モンゴルでの戦闘に勝利した根本中將は軍装を解かず、そのまま北京に駐屯した。そこで根本中將は「北支那方面軍司令官兼駐蒙軍司令官に就任、北支那にいるすべての日本人（軍民合わせて三十五万人）の命を預かる身となった。この頃、北支那では蒋介石の率いる国民党軍が、幅をきかせるようになっていたが、根本中將の率いる北支軍は、どの戦いでも支那兵を完膚なきまでにたたきのめしていた。日本兵はすでに装備も不十分で、弾薬も底を突きだしているはずなのに、それでも日本軍は勝ち続けた。次第に根本中將の存在は国民党軍や八路軍の中で「戦神」と呼ばれ恐れられるようになったのであった。昭和二十年十二月、蒋介石が北京に直接乗り込み、根本中將に面談を申し込んだ。根本中將の頭の中は、両者の争いを早急に終わらせ、日本人居留民を無事、安全に日本に送り返すことではないだった。

蒋介石との約束

長時間、話し合ったのちに、蒋介石の提案は①根本中將の率いる北支那方面軍とは戦わない。②日本人居留民の安全と、無事に日本へ帰国するための復員事業への積極的な協力をすると約束であった。その結果、三十五万人にも及ぶ日本人の復員・引き揚げ事業が一年以内にスムーズに遂行できたのであった。中国を去る時に根本中將は、蒋介石の協力に感謝し「東亜の平和のため、そして閣下の為に、私でお役に立つことがあれば、いつでも馳せ参じます」と堅く約束した。これが彼の「恩義」であった。台湾海峡を挟む最後の砦、この金門島の戦いは根本中將が見事なまでに国民党軍を指揮し、奇跡といわれる勝利を台湾にもたらしたのであった。